

19世紀後半のブリュッセルにおけるシャルル・ビュルスの都市設計思想とその実践

Charles BULS's urban design concept and his practice at the second half of the nineteenth centuries in Brussels

16141 田中 暁子

This paper aims to reveal the urban planning concept of Charles BULS. When he was the mayor of Brussels, between 1881 and 1899, the Haussmannism had already been called into question. As a mayor, he tried to improve sanitary situation reducing the number of impasses by the minimum required land, at the same time he tried to conserve historical monument, for lure the middle-classed people back in city center. What he thought as urban conservation was extended from the single monument to the group of historic buildings. His interest was not limited to historic preservation; he tried to make many beautiful roads and parks. After resigning, he published many books and he actively attended international conferences, and his urban design concept affected many urban planners not only in Belgium but also in other countries of Europe.

0 研究の概要

シャルル・ビュルス(Charles BULS:1834-1914)は、1881年にブリュッセル市長に就任し、オスマン主義に代わる都市整備の手法を模索し都市整備を指揮した人物である。また、1899年の市長辞職後は多くの国際会議に参加しその考えの伝播に努め、ドイツ、イタリア、イギリス、フランス等の都市計画家に影響を及ぼした。ヨーロッパにおいてはジッテやシュテューベンに並んで重要な人物と見なされ研究されているが^{1,2}、日本では平岡³が19世紀末のブリュッセルの緑地整備を対象にした論文で触れているのみであり殆ど知られていない。また、日本においては近年景観への意識が高まっているとは言え、未だ「守るべき都市景観」が如何なるものなのか共有されているとは言えない状態が続いている。

以上の状況を鑑み、シャルル・ビュルスが如何なる景観に価値を見出し、保全するようになったのかを探ることを研究の主題とし、実際に指揮を執った都市整備や論考を追っていくこととする。第1章でビュルス市長就任前の都市整備を整理し彼が力を持つようになる背景を探り、第2章でビュルスが実際に指揮を執った都市整備とその思想を、第3章ではビュルス市長辞任後の著作や論文に如何なる町の道路や広場などの配置が望ましいとされていたかを明らかにする。

研究の方法については、ブリュッセル都市整備史^{4,5}やビュルスの人物史の書籍と19世紀末から20世紀前半の雑誌記事やビュルスの国際会議での発表論文の読み込みによって行っている。

1 ブリュッセルにおけるオスマン主義の都市整備

ブリュッセルはイギリスの次に産業革命を体験する。加えて、1830年のベルギー独立で一国の首都となったこと、1835年に大陸初の鉄道が開通し交通の要所になったことにより、過度の人口集中が起こり、特に労働者が多く住む旧市街の環境悪化が問題となった。そこで、1837年から郊外拡張が行われた。郊外拡張により旧市街に住んでいた上流階級の人々は環境の良い郊外に移住し、中心部の環境は更に悪

化した。そこで、1867年11月に成立した区域収用法を根拠に土地収用により問題となっている地区の大規模な改造が行われるようになった。1865年に王位を継承したレオポルド2世と1863年にブリュッセル市長に就任したアンスバックがこれらの整備を積極的に行った。

1.1 郊外拡張

レオポルト地区

1838年のシュイス(T.F.Suys)の計画により旧城壁の東側に既存のブリュッセル公園の直線道路を城壁外までつないだ碁盤の目状の道路網のレオポルト地区が開発された(図1)。



図1 レオポルト地区計画図

ルイーズ大通り

ルイーズ門とカンブルの森を延長2.6km幅員55mの直線大通りで繋ぐ計画である。1844年に市により提案され、1859年から整備が始まった。

1.2 中心部改造

センヌ川地下埋設と中央大通り建設

コレラが発生するなど非衛生的であったセンヌ川を衛生化する。

南北鉄道駅間に広幅員街路を整備し、当時唯一の南北連絡経路であるヌーフ通り(rue Neuve)から南通り(rue du Midi)の交通渋滞を緩和させる。

証券取引所や市場などの施設を配置し、中心部に駅がなくとも商業活動が行われるようにする。

豪華な建物を配することによって、住環境の良い郊外に流出しつつあった有産階級の人口を回復し、税収の増加を図る。

記念碑的な噴水の設置やオギュスタン寺院による大通り分岐点のアイストップにより、直線大通りの単調さを克服する。

以上を達成するために、1865年に建築家レオン・シュイス(Léon Suys)によるセンヌ川の埋立てと大通り建設計画が発表され、1868年に工事着工、1871年に開通式が行われた。ノートルダム・オ・ネージュ地区改造

センヌ川の衛生化事業が一段落した1874年に、ノートルダム・オ・ネージュ地区改造計画が建築家アントワヌ・メネシエとジョルジュ・エゴワンによって提出された。ルーヴァン門から隣接するコングレ広場の記念柱に向かって軸線を通し、中心部に方形の広場を設け、そこから4方向に放射した道路を基本軸とする極めて幾何学的な配置であった(図2)。



図2 ノートルダム・オ・ネージュ地区改造計画

1.3 オスマン主義による都市整備に対する批判

センヌ川埋め立てにより1100軒の古い家が取り壊され町の歴史的な地区が徹底的に改造されるといふ事態に対して、工事が始まる前から批判が存在した。

都市整備の成果が目に見える形で現れ始めた1870年代には、シンメトリーな配置と直線道路による効果への疑念、

それに伴う地区の徹底的な破壊による古い町の特徴の喪失に対する批判が起きた。直線道路の先にモニュメントを置く手法に対する批判も高まった。

2 ビュルスが指揮を執った都市整備

2.0 ビュルスの略歴

ベルギーは1830年に独立したばかりの新しい国家であったことに加え、フランス語の圧倒的優位とフランス文学の蔓延により独自の文化が不在であった。ビュルスは青年時代に金細工職人として修行のためフランスとイタリアに滞在し、「自国の文化」の再興のためにフランス文化が蔓延している為に自国の文化への執着が低下している事実を警鐘を鳴ら

し、オスマン主義の都市整備により自国の歴史を象徴する地区が失われることへ反対した。

表1 ビュルスの略歴

1834	ブリュッセルの宝石商の子として生を受ける
1858-59	パリに滞在
1860	イタリアへ長期旅行
1862	教育行政改革グループに所属。
1864	1864~1880年:秘書、1880~1883年:会長
1877	ブリュッセル市議会議員
1879	公教育補佐官任命
1881	ブリュッセル市長就任
1893	「都市の美学」出版
1899	辞表を提出し市長を辞職
1899-1900	タイ、中国、日本へ視察
1903	アメリカで会議に出席
1914	死去

2.1 ビュルスが指揮を執った都市整備

2.1.1 オスマン主義の都市整備からの脱却

1881年にオスマン主義者であったアンスパックの後任者としてビュルスはブリュッセル市長に就任したが、アンスパックが手がけた整備によって生み出された大量の土地売却と未完成の都市整備も受け継いだため、出費を最小限に抑えながら事業を進める必要があった。そのため、綿密な収支決算表の作成と各分野の専門家による特別機関の設置によって、赤字が出ないように調整しながらも整備の質の高さを保ち、建築活動を支え、景気の波による影響を解消した。

これにより、聖カトリーズ教会の鐘楼の保存のように、歴史的な重要性を持つ場所を単に残すことが行われるようになったが、都市の総体的な調和の創出や魅力の向上の為に歴史的な場所が活用されることはなかった。

聖カトリーズ教会の鐘楼前広場の提案(1883)

聖カトリーズ教会はヴィエルジュ・ノワール地区再開発の為に収用されたブロックにあった。その改造の際に、ビュルスは鐘楼の前面に大きな広場を設置し、絵画的な景色を生み出すことを提案したが、完成後に転売可能な土地面積の少なさから反対者が多かった。



図3 ヴィエルジュ・ノワール地区改造計画最終案

ビュルスは、対案として提示された街区の内側に斜めに通される画一的な道路拡幅(図3)に反対したが、最終的にはこの計画案に同意した。ビュルスにとって最も重要なのは鐘楼

の保存であり 都市の全体的な魅力向上のために歴史的遺産を活用するという目的が理解を得られるような状況ではなく、この時点では開発の様相が財政面から決められることに反対しなかった。

衛生問題の解決

衛生問題を解決するために、優先的に改善をすべき不衛生な地区のリストが作られた。アンスパックのように地区全体を収用し、大規模な改変を行うのではなく、このリストに基づき、建物が売りに出された際に市が取得し、随時、袋小路を解消するという方法が取られた。税収の見込める中流階級(芸術家、事務員、商人等)を住まわせるためにアンスパックの頃より狭い約 6m 幅の住宅が計画された(図 4)。整備手法に関しては、超過収用により事業費を賄うというアンスパック時代と同じ手法が採られた。しかし収用面積を少なくすることで、公共投資とそれに伴う財政的リスクの減少や、不動産業者の仲介を経ない市当局と土地所有者の直接交渉、そして土地利用や衛生条件、形態規制や美観等について厳しい規則が付帯した状態での土地売却が可能になった。

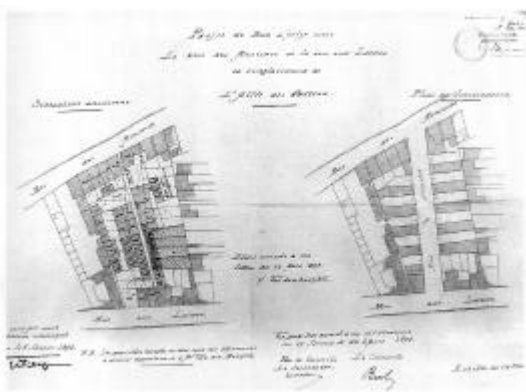


図 4 袋小路解消計画の図面

都市全体の計画

市の技術者であるシャルル・ヴァン・ミエルロが、「道路改善及び地区改造の総合計画」を 1885 年に発表した。

これは、市全域の機能を吟味した上で道路網を考える必要性を強く訴えたもので、市の規模に見合った道路の長さや傾斜、土地収用面積や土地の性質、地形、売却する土地の価値、重要なモニュメントの回避を同時に考慮しながら、活動拠点によって生み出される交通流を基に道筋が提案された。ピュルスは、ヴァン・ミエルロの考え方に同調し、計画の整合性に常に配慮しながら計画を立てるようになった。

2.1.2 過去の再評価

1888 年のトゥール・ノワールの復元について市議会においてピュルスは「尊敬すべき過去の痕跡が破壊されることは、住民の記憶を消去することを意味しており、住民の町に対する愛着を減少させてしまう、「遺産の細部、石ころでさえも、先祖の苦しみや戦い、勝利を物語っている。歴史に形と光景を与え、石ころが無言で示している歴史へ若者の興味を

駆り立て、現在と過去を繋ぐ糸となる。そして、近代化による均一化や平凡化を予防し、町の重要なアクセントとなる」と答弁し、都市拡張が進む中で歴史的都心の地方固有の特徴を明確にすることにより住民の無闇な郊外移住をくい止め、文化的都市を実現するために歴史的遺産を保存することを主張するようになった。

同時に、「私達の町の興味深い歴史的遺産を保存することは、住民だけでなく他所者にとっても面白みがある。また、同時に先祖が築いた城壁の遺産を保存することは愛国的側面からも意味がある」と述べており、観光客を惹きつける魅力を増大させる事や、中世都市の中央権力による保護からの開放を象徴する記念物の保存により住民の自治と誇りを取り戻させる事も目標としていたことが分かる。

しかし、ピュルスが初期に手掛けた王の館とトゥール・ノワールの復元に於いては、様々な困難が伴っていた。

王の館(La Maison du Roi)の復元(-1887 年)

王の館は 15 世紀にブリュッセルがブルゴーニュ公国の都となった当時の繁栄の名残を現在に留めたグラン・プラスに面した建物で、1536 年建設された。しかし 1695 年にフランスのルイ 14 世による砲撃により大半が焼失してしまい、オリジナルとは違う形で再建された。

ピュルスは王の館を 16 世紀の建設当初の繁栄を忍ばせる形に建物を復元することを主張し、「建物正面の 1、2 階部分には、円天井の基部の縁取りと鉄製の止め具による穴があり、確かに 1、2 階のファサードに沿って回廊が建設されたことを示している」とことや「既存の舗装の下を発掘し、発見された回廊の基礎」が発見された事実や、建設当時に描かれた絵には屋根の上に小さな尖塔が描かれていることなどによって復元の決定を行った。

そのため、建設当初のオリジナルの形が再現されているか疑問符も多く、ピュルス自身も後に真のオリジナルの姿とは言えないと回想している。



写真 1 (左)王の館再建前、(右)再建後

トゥール・ノワール(La Tour Noire)の復元(1888 年)

トゥール・ノワールの復元に於いても同様の問題に直面した。トゥール・ノワールは第 1 城壁の遺跡である。ヴィエルジュ・ノワール地区の密集した住宅に埋もれていたのだが、市による再開発事業の強制収用の際に発見された。

ピュルスは調査に基づき、「当初の構造を隠している建築物を取り除くことが、修復と復元を意味する。不確かなものを

加えるのではなく、以前の外見に塔を戻すために多くの古い要素を尊重する」ことを考えた。

ビュルスは、古代軍事建築専門家達に意見を求めた。彼らは「史料が残っておらず、建設当時の配置を一つに特定することは出来ない」と結論付けたが、維持管理の容易さを考慮し、円錐形の屋根を持つ建物を提案した。同時に「古記念物は再発見された状態のままでも保全すべきであり、個人的な考えに基づく下手な修復は、時代背景の誤認に繋がる」という忠告も受けた。

ビュルスは、「古記念物の保全には教育目的があり、粗野で破壊された状態で放置すると、記念物の発信するメッセージが伝わらなく、多くの見物客にとって興味が湧かない建物になってしまうと考え、円錐型の屋根を持つ建物への復元を実行に移した。

2.1.3 歴史的地区の保全

ローマのコロッセウムの補強とティトゥスの記念門の保存から、セメントを利用して欠落した部分を自然に隠し、真の歴史性を侵害せずに修復する方法を知り、啓蒙的な目的と考古学的真実性の折衷が可能になった。

「自然に芸術的な感覚が集中できる環境を作り出し、市民の目が道路上の良い物にだけ注がれるようにする」という方針のもと、単体の記念物の修復と同程度に歴史的地区の保存が重要な意味を持つようになった。

グラン・プラスの保全(1883-97年)

グラン・プラスの保全は、修理や建て増しが一貫性を持たずに行われていた個人所有のギルドハウスの修復と、星の館の再建という2つの面から行われた。

個人所有のギルドハウスの修復については1883年に、

- (1)ファサードを修復するための補助金を所有者に支給
- (2)費用が支給されたら必ず修復が実行に移されるようにグラン・プラス周辺の個人所有の建物を規制
- (3)建物の維持に関する取り決め

の3点について市と所有者の間で協定が結ばれ、徐々に実行に移された。

グラン・プラス保全の次のポイントは、星の館(Maison de l'Etoile)と名付けられた小さな建物の再建である。星の館は、1853年に市庁舎の南に隣接する狭小な路地を広げるために取り壊されていた。

ビュルスは1894年に市議会において、広場に面する全ての建物が一体となって調和を生み出していたと述べ、星の館の再建を提案した。

この計画は「以前は安普請のモチーフによって修理されオリジナルの状態ではなかった物を建設当初の様式で再建すること、人々が自由に回遊できるように、1階部分は回廊にする」といった特徴があった。

1896年には星の館の再建が完了し、視覚的には囲み感

のある空間だが、歩行者用は自由に行き来が出来る環境が出来上がった(写真2)。



写真2 (左)星の館再建前、(右)再建後
再建前の写真右端の建物が「白鳥の館」であり、道路沿いの壁面が全てむき出しになっている。

2.1.4 都市景観の美化

ビュルスは、「古都の美や誇りの核となっている歴史的記念物を保全するだけでなく、古都に更なる魅力を加え人々を惹きつける為の機会を逃してはいけない」と述べ、都市景観に新しい価値を与え人々を惹きつける都市へと蘇らせるために歴史的環境の保全だけでなく、美と文化を感じさせる新規開発を行った。

プチ・サブロン広場(Square du Petit Sablon)の整備

1880年にビュルスが広場を整備することを決定し、アンリ・ブヤール(Henri Beyaert)の設計により1890年に完成した。斜面を利用して論理的かつ美しく植栽がなされている。広場の中央には16世紀のブリュッセルで政治や芸術において活躍した人々(王の館を設計した建築家、ウィルブルック運河を完成させた市長、メルカトル図法の地図の開発者等)を称えた立像が配置され、広場を取り囲む柵には中世のギルトを現す48体のブロンズ像がゴシック小円柱の上に配置されている。

ブリュッセル・アトラクション(Bruxelles-Attractions)

都市景観の美化には、観光客の増加や商業活性化などの目的もあった。1886年にブリュッセルの魅力を高めるためにブリュッセル・アトラクションという民間団体が設立されビュルスが初代会長に就任した。この団体の活動はガイドブックの発行、観光名所のアクセシビリティの向上、余暇施設の提供の大きく3つに分けられる。

2.2 モン・デザールを巡る争い

2.2.1 モン・デザール地区整備計画

ブリュッセル旧市街の南北を走るセンヌ川の東部には河岸段丘が形成されているが、段丘崖が岬のように飛び出した部分(モンターニュ・ドゥ・ラクール)は急勾配のカーブの多い狭小道路であり交通事故が多発していた。また、モンターニュ・ドゥ・ラクールに隣接するサン・ロッド地区は住宅が密集した不衛生な地区であり19世紀中葉から数々の改善計画が提案されていた。

計画の壮大さからアルフォンス・バラによるモン・デザール地区整備計画(1880)がレオポルド2世によって推された。ピ

ユルスは、バラの計画は 出費が莫大になる、新しい広場も美術館も荒涼としたものになる、建設される巨大階段を誰も昇降しない、今日非常に商業が栄えているマドレーヌ通りを潰すことになる、歴史的な建物が壊される、点から異議を唱えた。

ピュルスの提示した対案

ピュルスは市の役員会の名義で1893年にバラの計画の対案を提出した。これは、マケカーブは、市の財政事情が良くなるまで延期し、計画の実行は一部の衛生状態の改善と車の通行に十分なだけの道路拡幅に限るというものであった。これにより不必要な破壊を避け、デュピュック邸やラヴァンスタイン邸周辺の調和を壊さずに済むと述べた。

更に、1893年12月に出版した「都市の美学」に於いて、「ファサードの連続、屋根のジグザグなどにより生まれる有機的な道路沿いの家並みの絵画的美しさがモンターニュ・ドゥ・ラクールの魅力である。しかし、その魅力は周辺と一体になって形成されているものであり、一部でも破壊されると地区全体が台無しになってしまう。可能な限り古い街並みの歴史的・地域的特徴を残そうではないか」と訴えた。

しかし、市議会議員のエイヴァールト(Heyvaert)がバラの計画に近い市の役員会の計画への対案を提出し、その数週間後の1894年4月30日にはエイヴァールトの計画を実現するための補助金がつき、1895年1月10日に土地収用が始まりサン・ロック地区の取り壊しが始まった。

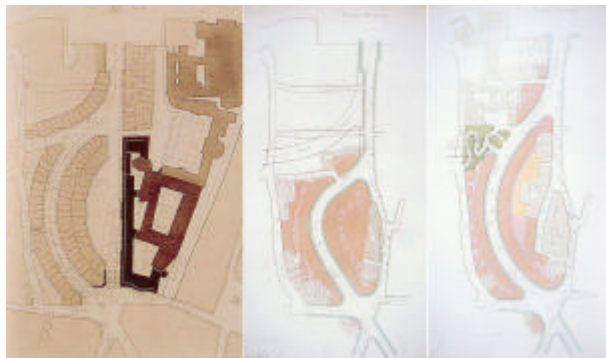


図 5 (左から)バラのモン・デザール計画、市の役員会の対案、エイヴァールトの市の役員会の対案への対案

2.2.2 「都市の美学」の執筆

バラの計画に反対する中で 1893 年に出版された「都市の美学」は歴史の積み重なった古都に於ける都市整備のあり方を説いた本であり「市の財政を圧迫せずに、現代的生活の要求の中で過去の遺産を破壊せずに地方や国家の特徴を守る」といふピュルスの理念のもと、研究の必要性、技術的観点、美学的観点、考古学的観点、公共広場、植栽、郊外、民間建築、公共建築の9章について全41頁(第二版は47頁)で書かれている。彼が指揮した都市整備の理念の集大成といえる内容である。

3 広場や道路などの公共空間の理想像の追求

「都市の美学」は国内外において大きな反響があり、以後は論文を発表することで世論をある程度操作することが可能になった。また、多くの国際会議に呼ばれ発表をした。市長辞職後の彼の著作から如何なる公共空間の実現を求めているのを見えていく。

3.1 レオポルド 世の威圧的な都市整備への反対

3.1.1 王宮広場再整備計画

レオポルド2世のお抱え建築家であったマケ(Maquet)は、1903年に王宮広場の再整備計画を立てた。これは、公園の多角形の部分に宮殿の前庭を作り、前庭と王宮前広場の間に柵と4つの小さな建物を宮殿と公園の間に設置しアクセントを付け対称性を強調させる計画であった。加えて、広場はレオポルド地区の碁盤の目状の道路に平行な長方形であり非常に幾何学的計画であった。

この計画に対してピュルスは、全体の調和美に貢献している公園の凹の部分と道路幅員のバランスにより形成されている閉じられた空間の破壊、対称な軸を通す手法にのみ傾倒し、公園の環境に見合った幅員を考慮しない手法、に対して反対を唱えた。ピュルスは住民等の広場の利用者にとって最適な環境を追求していた。

3.1.2 中央駅開発計画

ブリュッセルの欧州の中継基地としての性格を強化するために、北駅と南駅を連絡し中央駅を開設することが1895年にレオポルド2世によって提案された。

1903年4月7日にPutterie地区の一部の建物の高さの規制も含む中央駅を開設するための協定が市と国間で結ばれた。マケの計画した高さ制限は王が王宮のバルコニーから日市街の屋根並みを望むことを想定したものであった。

専門委員会による協定改善のためのスタディ

レオポルド2世とマケの死後、協定の見直しがされることになり1911年にピュルスを委員長とする専門委員会が設置され、様々なスタディが行われた。1912年に出版された委員会のレポートでは、マケにより提案された王宮広場からの眺望以外に、クダンベルグ通りとビブリオテック通りの高みから市庁舎とバルヘム・サン・タガットの丘への眺望を保全する高さ制限のスタディが行われた(図6)。これらのスタディは市庁舎の尖塔が歩行者の目の高さから最も美しく見える角度となる



図 6 Passage de la Bibliothèque からの眺望シミュレーション

眺望点を選んで行われた。

3.2 国際会議から見る都市設計思想

ビュルスは多くの国際会議に参加した(表 2)。彼の役割は、既存の研究から ドイツ語諸国の理路整然とした都市計画の手法をフランス語諸国に紹介、市長在任中の実践から得た都市が従べき美の法則を広めたこと の 2 つに整理できる。

表 2 ビュルスが参加した主要な国際会議

	会議名	ビュルスの役割
1895	コロンビア博覧会	シュテューベンの論文をフランス語に訳す
1897	ブリュッセル国際建築家会議	通訳及び副議長
1898	第 1 回国際アートパブリック会議	アートパブリック協会会長として会議を準備。
1900	第 2 回パリ国際アートパブリック会議	
1903	ニューヨークファインアー 会議	
1905	第 3 回国際アートパブリック会議	準備委員会会長及びセッションの議長
1906	第 7 回ロンドン国際建築家会議	セッションの議長
1910	第 4 回国際アートパブリック会議	
1910	ブリュッセル行政学国際会議	
1913	ヘント国際会議及び展覧会	国際市町村連合評議会委員

3.2.1 アートパブリック国際会議

1893 年に「道路及び公共空間に適用された芸術に関する作品」という協会がウジェーヌ・ブロウルマン(Eugène Broerman: 画家)により設立され、ビュルスが会長に就任した。その団体は国際アートパブリック協会(Comité national de l'Art Public)へと名称を変更し、1898 年ブリュッセル万国博覧会に併せて、国際会議を開催した。広告物や看板等の細部に渡って公共空間の魅力を高め、人々の芸術的、知的好奇心を高めること、その目的のために時にはコンクールなどのイベントも開催すること、学校や美術館における美的教育の重要性、公共の利益が個人の利益に優先し芸術的目的のために介入することが可能であることが論ぜられた。

3.2.2 1907 年の第 7 回ロンドン建築家会議

ビュルスは「道路とオープンスペースの計画と配置」というセッションの議長を務めた。ここでビュルスは、モニュメンタルな広場について、芸術的な効果を生みだすものと述べ、特に詳しく説明している。「広場に面する家の高さの調和が必要」で、広場の形は「1:3 の比率の長方形や台形、三角形が望ましく、円形や八角形の広場は非難に値する」、広場の装飾は「非対称な配置の方が良く、像や噴水等を広場の中心に据えるのはよろしくない」としている。広場の地平面については「多少の起伏があった方が美的観点からも実践的な面から好ましい」としている。

結論 ビュルスの活動 - ブリュッセルにおける歴史的環境保全の概念の誕生と、その展開

ビュルスが活躍した時代にはブリュッセルにおけるオスマン主義による町の固有歴史の喪失という危機がブリュッセルを襲い、それに対する反感が高まっていた時代であり、オスマン主義に変わる都市整備手法への要求が高まっていた時代であった。

ビュルスは、必要最小限の土地収用で袋小路の解消により衛生問題の解決に努め、同時に「歴史的環境保全」により住民の意識や土地への愛着を高め、郊外に移住した有産階級の呼び戻しを図った。「歴史的環境保全」の対象はトゥール・ノワールや王の館の復元のような単体から、建造物群へと広まっていった。

プティ・サブロン広場のようにブリュッセル独自の文化の追求が歴史的建造物の保全以外においても行われるようになった。それは公共空間の細部まで配慮し、住民が誇りを感じる町を作るといことにつながって行き、アートパブリック国際会議により、各国の都市計画家の知る所となった。

しかし、ブリュッセルに於いては国家の威容を示すための大規模な破壊を伴う計画が、ビュルスの活躍の一方で未だ続いていた。第 3 章でビュルスがレオポルド 2 世の計画に対抗するために対案を示したことは見てきたとおりである。ここでは、王宮広場のように当初の設計意図の保持と歩行者の視点から考えた整備が訴えられた。

今後の課題

現在のベルギーでは 1980 年代の地方分権により都市計画や文化財保護に関する一切の権限を各地方政府が持つており、近年景観保全の動きが活発である。その後の都市整備や都市計画法、文化財保護法などに与えた影響までを追い、20 世紀前半から現在までを一本の糸で繋ぐことが今後の課題となる。

更に、本論文ではビュルスの都市設計思想を追うところから焦点を絞ったが、シュテューベンやアーパークロンピエ、アンウィンなど同時代の都市計画家に与えた影響を追うことも必要となろう。

主要参考文献

- 1) SMETS Marcel, 'Charles Buls', Pierre Mardaga, Liège, 1995.
- 2) SOLVAY Lucien, Notice sur Charles Buls, *Annales de la Société d'Académie Royale de Belgique*, 107, Bruxelles, 1941, pp.119-139.
- 3) 平岡直樹, 「19 世紀後半から 20 世紀前半の都市計画理念がブリュッセルの緑地形成に及ぼした影響」, 信州大学農学部演習林報告, 37, 2001, p163-257
- 4) DEMAY Thierry, *Bruxelles, Chronique d'une capitale en chanter* 1, Édition C.F.C, Bruxelles, 1990.
- 5) LEBLIQ Yvon, *Histoire de l'aménagement des villes*, Press Universitaires de Bruxelles, Bruxelles, 1998.